

「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」 (ルカによる福音書24:13-35)

先週読まれたヨハネによる福音書では、墓が空っぽであったことを確認した弟子たちはなぜか家に帰ってしまい、後にご復活の主イエスに出会ったマグダラのマリアの報告を受けても、家の鍵をすべて締め、こもってしまいました。今週のルカによる福音書では、別の行動をとった弟子たちの姿が記されています。エマオへ向かった二人です。彼らは、墓が空っぽであったことを知ると、希望を失い、落胆のうちにエルサレムから離れてしまったのでした。先週の福音では、恐れ、怯える弟子たちにご復活の主イエスは姿を現されました。今週の福音でもまた、別の仕方でご復活の主イエスが姿を現されます。墓が空っぽであることを知り、散り散りになった弟子たちですが、主イエスはご自分の方から、それぞれにご復活の姿を現されるのです。

エマオへ向かった弟子たちは、どのような思いでエルサレムを離れたのでしょうか。弟子たちが主イエスの死を実感したのはいつだったのかと想像してみます。身近な人の死に直面した時、その人の死を実感するタイミングは、人それぞれ異なります。たとえば、病院で死を宣告されたとき、ご葬儀のとき、その方がいなくなったリビングを眺めたとき…いろいろなタイミングがあると思います。東京聖テモテ教会と東京諸聖徒教会では、4月に5名の信徒が逝去され、ご葬儀が続きました。そのなかで、火葬場ではじめて身近な人の死を実感する方が多いように感じます。あらためて現実として突きつけられる、という方が正確かもしれません。肉体が目に見えるときには、まだその方が一緒にいることを感じるすることができます。しかしいざ火葬されるというとき、火葬場の係の方の「お別れです」という言葉とともに、いよいよ本当にお別れだ、と迫られるのです。わたし自身、父の葬儀の際、いよいよ火葬場で遺体が焼かれるとき、本当にもう会えなくなるのだ、という思いが押し寄せ、葬儀の間は泣かなかったのに、はじめて涙が溢れてきたことを思い出します。もう会えなくなってしまう、ということを実感したように思い出します。弟子たちも同様だったのではないかと想像します。「三日目に復活する」という言葉への希望を、遺体があるうちは失わずにいられたのですが、主イエスの遺体がなくなったとき、彼らもまた主イエスの死を現実として突きつけられたのではないのでしょうか。そしてそのとき、弟子たちは復活の望みをも失ってしまったのです。こうして二人の弟子たちは、主イエスのご復活の約束を信じることなく、落胆のうちにエルサレムを後にしたのです。

エマオへの道中、二人の弟子はそれまでに起こった出来事について語り合っています。自分たちが見た主イエスの受難と死、そして空であった墓の出来事の意味を理解しようと、互いに意見を交わしていたのかもしれませんが。この二人に、ご復活の主イエスが現れ、共に歩き出します。しかし、二人の目は遮られていました。主イエスが共におられるにも関わらず、それが分からないのです。そして二人は、主イエスに向かって「ナザレのイエス」について語り始めます。力ある預言者、イスラエルを解放する方であるという期待、彼らの主イエスに対する理解は誤ってはいませんでした。しかし彼らは、「イエスは生きておられる」という御告げを信じることはできませんでした。墓は空だった、という知らせを聞き、主イエスの肉体が失われてしまったことを知ると、そこで「もう、終わった」という気持ちに支配されてしまったからです。

彼らは主イエスの死という圧倒的な現実と直面し、「死」に囚われていました。彼らの目が遮られていたのはこのためです。そんな彼らには「復活した」という天使の声は聴こえるわけありませんでした。目の前に復活の主イエスがいてくださっても、分かるはずもない。エマオへの途上、その彼らの話しに主イエスは黙って耳を傾けます。そして主イエスは、「物分りが悪く、心が鈍い」と言って、彼らの頑なな心を嘆かれました。しかし主イエスは、死に囚われて、ご自分の言葉を信じることはできない弟子たちを見捨てることはありませんでした。主イエスはその

彼らに伴い、目を開いてくださるのです。今日のみ言葉は、ここから物語の主役が変わります。これまでは、二人の弟子たちが語りの中心でしたが、ここからは主イエスが二人を導きます。死に留まる者から、命を与える者へと物語の主役が代わるのです。

主イエスは二人に聖書を語り聞かせます。それは、創造に始まる、神が人に命を与えた話し、神が人を愛し抜かれた話しです。死に囚われていた彼らのまなざしが、命を与える神の救いへと向けられていきます。死に留まっていた彼らの心に再び明かりが灯され、彼らの心が再び燃えるのです。この主イエスの話しを聞き、心燃えた二人の弟子は、先へ行こうとする主イエスを無理に引き止めます。しかし、まだ彼らの目は遮られていました。み言葉を聞いて感動しているだけでは、心燃えているだけでは目は開かれないのです。遮られていた二人の目は、主イエスが共に歩いて、聖書の説明をし、共に食卓についてパンを裂いたときに開かれ、ご復活の主イエスを見たのでした。ご復活された主イエスに出会うことができるのは墓ではなく、み言葉に耳を傾け、裂かれたパンを共に食すときだったのです。主イエスに出会った彼らは、失望のうちに下ってきた道を、今度は希望をもって上って行きました。そして起こったことを仲間に知らせました。

ご復活の主イエスは、エマオへ向かう二人の弟子に現れ、歩みを共にされました。わたしたちも信仰の道を歩むなかで、共にみ言葉を聞き、共に語り合うとき、そこに主イエスがいてくださいます。事実、クリスチャン誰も、「心燃えた」経験をしたことがあるはずです。そこに主イエスがおられたからです。今日の福音書が描かれた聖画は多くあります。それだけ共感する画家が多かったからではないか、とわたしは思います。スイスの画家ロバート・ズンド作『エマオへの道』は、二人の弟子の真中を白い衣の主イエスが歩いている絵です。この絵の真中の主イエスを隠してみると、わたしたちのリアルな現実があるように感じます。わたしたちが誰かと二人で語り合っているとき、わたしたちには見えずとも、たしかに主イエスはおられるのです。わたしたちが死や絶望に留まってしまい、目が遮られていても、主イエスは伴い、導いてくださいます。教会では、今は物理的に集まることが許されません。しかし、わたしたちは離れていても、同じ主に向かって礼拝をするために同じ主に集められた神の民です。エマオへ向かった弟子たちのように、わたしたちも日々の営みのなかでの失望や、悲しみ、苦しみをそれぞれ抱えつつ、集められています。そんなわたしたちが礼拝を通して共にみ言葉を聞き、パンを裂いて共に分かち合うとき、ご復活の主イエスはそこにおられます。今は物理的に叶わずとも、たとえインターネットの画面越しであろうと、部屋で一人祈っていようと、同じ主に祈り、恵みを分かち合う礼拝をささげるなら、ご復活の主イエスはそこにおられると信じます。

墓が空になった、という出来事は、ご復活の主イエスがすべての人のところに来てくださる、ということのはじまりでした。「イエスは生きておられる」ことをいつも忘れず、主イエスと共に歩みましょう。そして、喜びのうちにこの世へと遣わされてまいりましょう。